

東日本大震災のフィールドワーク 2 最終レポート

東日本大震災後の「鎮魂」の営みとその意義 — 普門寺「五百羅漢像」に込められた思いとは —

岡庭佑美

1.はじめに

本講義を履修した理由は大きく分けて3つある。

1 つ目は、広く世の中のことを知りたいからである。大学に入って様々な人と出会い、多くの経験をした。その中で、普段あまりニュースを見なかったり、興味の範囲が狭かったりする自分は、世の中の仕組みや、社会がどのように成り立っているのか、どんな人がいるのか、日本で何が起きてきたのか、はたまた今現在何が起きているのか、などについて全く知らないのだと痛感した。そこで、1 つ「東日本大震災」という出来事を切り取り、話を聞き、そこで何があったのか、どのような気持ちを抱えた人がいたのか、その過程でどのようなことが問題だったのか、などを知り、漠然とではあるが、世の中のことに目を向け、自分とは違う経験をした人に興味を持てるようになる 1 つのきっかけにしたいと考えた。

2 つ目は、大学でしか学べない授業をとりたいと思ったからである。私は今 4 年生で、大学で授業を受ける機会も残り少なくなった。そこで、社会に出てから独学で本を読んで学ぶことができそうな授業よりも、大学に通うことでしか学べなそうな授業をとり、残りの学生生活を有意義なものにしたいと考えたのだ。

3 つ目は、自分自身の興味分野である「《人の死などといった悲しみからインスピレーションを受け、人々が何か（主には芸術作品）を生み出す営み》について知りたい」からである。今回のインタビューとレポートは主にこのテーマに基づいて行いまとめている。これに関して詳しくは後述する。

以上 3 つが本講義を履修した理由である。

2.本研究における問い

震災に限らず、亡くなった人に対してただ「祈る」ことにとどまらず、「芸術作品を作って捧げる」という行為には人のどのような気持ちが込められ、どういう意図で行われているのかについて問う。そしてそれがどのように人（死者だけでなく、生きている私たちにとっても）に影響を与え、どのような意味をもたらしているのか、更にはその際の芸術にはどんな意味や効果があるのか、その価値についても考える。なぜなら、本来エンタメや娯楽としての要素が強い芸術作品が、そういった側面や商業目的を脱出し、「ただ死者に捧げる」というためだけに存在していることに、芸術としての不思議な威力や神秘性・

超越的なものを感じ、そのような芸術の側面を魅力的に思うからである。

そこで本研究では、東日本大震災後の「鎮魂」の芸術的営みに、人はどのような意味を見出してきたのかについて見ていく。私が考える「鎮魂」の芸術的営みとは、追悼歌を作成して歌ったり、祈念モニュメントを作ったりなど、音楽や美術といった何らかの芸術的手法を用いて、死者・そして私たちを慰める行為である。東日本大震災では、約1万5900人が亡くなり、加えて行方不明者約2800人、負傷者約6100人も人的被害が出た。そしてそこには家族や友人など、かけがえのない人との別れが様々な形で存在した。その別れを決して無駄にせず、風化を防ぎ次世代へ繋ぎ、そして「死者との対話」を目指し、鎮魂という意味を込めて様々な形で記憶が表現されてきた。その実際の例として、東日本大震災後には「奇跡の一本松保存事業」や「各地での復興祈念公園の建設」「復興支援ソングの作成」などの取り組みがあった。

そこで今回は、その一例として、岩手県陸前高田市の普門寺というお寺で実行された「五百羅漢像制作プロジェクト」に注目する。五百羅漢像制作プロジェクトとは、震災後の2013年から5年間にかけて実施された、震災遺族や被災者、そしてボランティアなどが羅漢像（悟りを開いた修行僧のこと）を自ら作るというアートプロジェクトである。このプロジェクトは、震災犠牲者への鎮魂・追悼の他に、遺族らが人と関わり、再び前を向けるようにするという心理療法としての場を作り上げることも目的であった。5年間で約500人が羅漢像の制作に参加し、できあがった羅漢像の数は569体にのぼるため、「五百羅漢像制作プロジェクト」と呼ばれている。

震災というと悲しく暗いイメージが思い浮かぶが、その反面、それから立ち直り、未来や希望をイメージした作品や美しい景観も多く残されている。したがって、本研究では「震災後」の人々の前を向く姿やその取り組みに焦点を当てていきたい。

3. 問いの設定背景

幼少期からピアノを習っていてクラシック音楽に馴染みがある中で、「レクイエム」という曲に特に魅力を感じてきた。レクイエムとはラテン語で「安息を」という意味で、カトリック教会における葬式で流す宗教音楽だ。換言すれば死者に捧げる曲である。死者のための音楽が存在することを知り、まず「亡くなった人に対して作品を作ること」そのものの行為に興味を持った。亡くなった人に対してメッセージ性のある作品を制作しても、それは本人に届くわけではないので、言ってしまえば意味がないように思う。しかし、それでも作品を作りたいと思うこと、そしてそれを捧げたいと思うことが、人間の営みとしてとても意義や価値のあることだと感じた。また、レクイエムは人の死がテーマの作品であるにもかかわらず、優しく落ち着いたパートも含まれている。そういった部分の音楽的な美しさから、死が恐怖や醜く汚いものである、というイメージを払拭し、「人は死んだら天国で安らかに眠ることができる」という願望や慰めを私たちに与えてくれ、死者だけでなく生きている人たちにとっても重要な役割を果たしていることに気がついた。こう

いった芸術作品による鎮魂や追悼の表現には、漠然とではあるが、根本的な人間らしさが垣間見える気がしている。したがって、震災に関しても、なくなってしまったものだけではなく、「悲しみの中でも生まれたもの・悲しみの中でも人が何かしらの意味を見出そうとした行為そのもの」にも目を向ける必要があるのではないかと考えている。

4.先行研究

4-1.災害などの際にアートがどのように機能するかについて

始めに河東仁の「大災害の復旧復興においてアートの果たしうる機能—もう一つの別の時空間、そして鎮魂—」という論文を読んだ。河東仁は災害からの復旧復興においてアートが果たす機能として、主に福島での復興アート事業に触れ、1) 内側の人間同士、内側と外側の人間同士を繋ぐ機能、2) 想像力・創造力の発現する場として現実社会の課題を解決する新たな方策を産み出す機能、3) ことに大災害時には普段は抑えられている様々な思いを発出する場、4) 「笑い」を引き出す機能の4つがあると指摘している（河東2020：102）。

1) に関して、河東は、フェスティバル FUKUSHIMA!(震災後、福島で1万人を集めて行われた野外フェス)に注目し、祭り関係者が、放射線が体に付着することを防ぐために風呂敷を地面に敷くことをSNSで発信したところ、全国各地から風呂敷が届いたことに触れている。そして、その祭りの当事者である大友良英さんへのインタビューで、彼が「福島の人だけでなく、日本中の人から風呂敷を送ってくれて、縫いにも来てくれました。内と外をつないでいくことの重要さをこのとき知りました」と述べた部分から、アートの力には人を繋げる力があると結論づけた。

2)に関して、河東は作家ミヒャエル・エンデへのインタビュー記事を引用している。それによるとエンデは、「事実の意味を与えるのは内面なのです。外部世界の問題を解決するには、まず内面の世界に“逃避”しなければならない。社会を変えたいなら、まず新しい社会についての豊かなイメージを持たねばならない。そうして初めて外部の状況を変えて行ける」（河東2020：99）と述べている。そして河東は、心の内面の世界に自己を浸すことは、まさにアートの力によって達成されうると指摘する。

3)・4)に関しては、アートプロジェクトという非日常的な催しが、様々な感情の解放場になっていると説いた。

この論文により、アートプロジェクトが生存者にもたらす心理的効果について理解できた。また、なぜ「鎮魂」という概念を芸術作品として表現しようと思うのか、という疑問に対し、上記の2)の理由に特に納得できた。多数の死者が出るような社会を大きく揺るがす出来事が発生したとき、それに向き合い立て直していくにはまず個々人が「自己」に向き合い、自分の内面の中で整理を行うことが重要なのである。そしてそれを成し遂げることができる媒介物として「芸術」が最も相応しいものだということである。以上のことか

ら、「鎮魂」という概念になぜ芸術が関わってくるのか、なぜ芸術でなければならないのかということが分かった。

しかし、この論文では視点が主に「生存者」に向けられており、アートプロジェクトが鎮魂というよりもむしろ、生き残った人らの心を癒す「心理療法」としての色が強い印象を受けた。「亡くなった人らの魂を慰める」などの死者へ向けた意味合いについては言及していなかったのである。したがって、本研究においては、死者と私たちを結びつける手段としての「芸術作品」や、死者をも空間や視点に含め、「死者へ思いを馳せる」という目的にアートがどのように機能するのかを考えたい。

4-2.五百羅漢プロジェクトについて

次に、佐藤文子らの『東日本大震災 陸前高田 五百羅漢の記録—こころは出口をさがしていた—』という書籍を読んだ。佐藤文子ほか（2021）には、五百羅漢像制作プロジェクトの発端やその効用などについて、主催者側と参加者側の声がまとめられている。このプロジェクトの発端は「犠牲者への鎮魂の祈り」と「制作者の心の癒し」を目的として始まり、結果として、参加者が仲間同士を心の支えとし、悲しみを分かち合い、将来のことを考えられるようになり、心と身体に寄り添った芸術療法になったと述べている。また、このアートプロジェクトにおいて制作物を「石の羅漢像」にこだわった理由として主に2つ挙げられている。まず「石」については、石が何かの衝撃を受けたとき、クッションなどとは異なり反発度が低いため、力を加えると心地良く、制作者たちのやり場のない気持ちの捌け口になるからという理由である。そして「羅漢像」については、岩手県の歴史・文化的背景を考慮し、既に岩手県の過去の大災害や飢饉の際に五百羅漢像を造営した歴史があり、五百羅漢像にゆかりがあるからという理由であった。

この書籍からは、五百羅漢像制作プロジェクトの発端と経緯、そしてなぜ制作物が五百羅漢像である必要があるのかという部分について理解できた。「石」で「五百羅漢像」を作るということは想像以上に意味が深いものであり、材質から入念に考え抜かれた計画であったことが窺えた。

しかし、プロジェクト参加者の心の癒しという視点で言うと、石を用いて作品をもっと自由に作らせる活動でも良かったのではないか。「羅漢像」は死者の供養の意味合いが強いため、そこには亡くなった人の面影や姿を意識せざるを得なくなる。そして完成後にはお寺のご住職によって、「開眼法要」という儀式が行われていたようだ。開眼法要とは、石の像に魂を入れて羅漢にするためのものである。このように、生き死にを露骨に連想させる作品作りは逆に制作者にとって心の負担にならなかったのだろうか。またそれに加え、羅漢像とすることで宗教的な制約も加わるため、この要素が原因で作品を作ることを断念した被災者が出てくる可能性に対し懸念点などはなかったのだろうか。

4-3.まとめ

以上を踏まえ、先行研究で疑問が生じた点は大きく2つある。

1つ目は、「生者の心理療法」のみに限定されることのない芸術を用いた鎮魂の意義はいかなるものかという疑問である。先行研究では、我々生きている者にとって苦しみを乗り越えるために芸術は有効であることが分かった。しかしそれでは「鎮魂」と称したアートプロジェクトも、実は我々のみにとって都合が良い自己満足のように感じられてしまい、「死者の魂を鎮める」という意味が薄れているように思われた。したがって、このインタビューでは「死者と私たちが芸術を通して繋がること」という死者の存在も含めた空間に、芸術がどう効果的に働くかを考察したい。

2つ目は、五百羅漢像制作プロジェクトにおいて「羅漢」を作ることに對し、上で述べた予想される懸念を上回る意義がどれほどあったのかという疑問である。やはり羅漢という制作物である以上、単なる芸術療法ではなく死者の「鎮魂」に大いに関連があり、その点で意味があるように思う。上記の1つ目の疑問と絡めながら考えたい。

また、先行研究で生じた疑問に加えて、「鎮魂とは何か」「鎮魂の意を芸術表現する意味は何か」という根本的なところについても、お寺のご住職として死者と対峙する機会がある熊谷さんの考えをお聞きしたい。

5.インタビューの概要

五百羅漢像プロジェクトが行われた普門寺（陸前高田）の30代目ご住職である熊谷光洋さんに話を聞いた。

鎮魂や追悼の芸術的表象に関心があることを授業で発表したところ、先生が普門寺と五百羅漢像制作プロジェクトのことを教えてくださった。亡くなった人のことを思い浮かべながら、死者への鎮魂と参加者の心のケアという目的で、「芸術療法」として五百羅漢像を彫るというこのプロジェクトに大変興味が湧き、早速普門寺に電話をした。ご本人である熊谷さんが電話に出られインタビューを快諾してくださり、普門寺で話を伺い、五百羅漢像を実際に拝見することになった。事前に五百羅漢像制作プロジェクトについて書かれている書籍『東日本大震災 陸前高田 五百羅漢の記録—こころは出口をさがしていた—』を読み、イメージを膨らませた。

インタビューは2024年8月7日14時～17時に普門寺にて行った。16時半頃までインタビューを行い、16時半頃から17時まで、お寺の中や五百羅漢像の案内をしていただいた。同行者は小川さんと高橋さんで、当日は車で普門寺まで向かった。熊谷さんと熊谷さんの息子さんが出迎えてくださり、小さい部屋に案内していただき、そこで話を伺った。熊谷さんはユーモアに溢れた方で、インタビュー中は終始和やかで楽しい雰囲気だった。

6.インタビュー結果

インタビューでは大きく分けて、熊谷さんご自身について、東日本大震災について、そして最後に五百羅漢像プロジェクトについての3点をお聞きした。本報告書でも3つの部位に分けてまとめることにする。

6-1.熊谷さんご自身について

6-1-1.生まれ～大学時代

昭和27年2月12日、陸前高田で生まれる。高校まで陸前高田で暮らしており、大学生の時に上京した。住職になることは自分で決めて大学に進学し、住職になるためには仏教の始まりであるインド仏教からと考え、それが広く学べる仏教学部仏教学科に入った。熊谷さんのお父様の恩師が唯識学の教授であったため、卒論では唯識論を研究した。唯識論は現在の心理学に通ずるものがあり、約2500年前の古代から、現代解明されている深層心理や潜在意識の研究がなされていることに驚いたそうだ。その後1年休学して福井県の永平寺に行き、修行をし、それから大学院に進学した。このタイミングで永平寺に修行に行くことを決めた理由は、お父様の持病を考慮し、突然の不幸にも対応していつでも住職になれるようにするためだったそうだ。修行の目的は、主に和尚としての自覚を持ち、そして自信を持って布教することができるようにすることであった。永平寺での修行が1番厳しいと言われていたため永平寺を選んだそうだ。

6-1-2.家庭児童相談員～住職

大学院を出て東京から帰ってきてからは、家庭児童相談員として役所で働いていた。そこで何らかの問題を抱える子どもを受け持っていた。この仕事に就いたきっかけであるが、その所長（熊谷さんの同級生のお父様）が普門寺の檀家さんであり、「しばらく預かる」と言われよくわからないうちに相談員になったという。9年その仕事をして、お父様が亡くなった31歳のタイミングで住職になった。その後2年くらい福祉の仕事をしていましたが、寺が忙しくなり兼務することが厳しく、お寺1本に絞った。住職になってから、役所での仕事の経験が生かされたことがあるという。1つ目が会計法である。役所での会計知識が役立ち、お寺でのやりくりが楽になったようだ。2つ目が東日本大震災のときである。東日本大震災発生時、当時の役所の職員が皆元同僚の人たちであった。そのため、亡くなった人に関する相談が沢山熊谷さんの元に来たのである。結果的に、身元不明者のお骨は普門寺で預かることになった。知り合いの職員も震災で亡くなったショックもあり、お骨を体育館やプレハブに寂しく置いておくことはできなかったそうだ。「こんなときに助け合わなくてどうするんだ」、「お寺がやらないで誰がやるんだ」、「何でお寺がやらないの？こんな時ほどお寺。門戸を開くべき。頼まれたらやるのが普通じゃない？」という熊谷さんの言葉が印象的であった。熊谷さんは、魂の供養は寺院が最も適していて、お寺で

預かることで毎日屋根のある場所でお骨を守ることができ、そして寺が助け合いの最前線にいることが大事だと考えていたようだ。

また、当時の市長とも繋がりがあったため、震災で亡くなった人の供養をする際に市長が来て挨拶をしてくれたこともあった。市長が来てくれるとそれが公的なものになり、遺族やボランティアの人には喜ばれたようだ。

周りの人とよくコミュニケーションがとれていたと熊谷さんは言う。人との交流をとっても大事にされている方だと感じた。

6-1-3.お寺と地域のつながり

熊谷さんは、檀家さんに限らず、多くの身元不明者の遺骨を預かり供養をしたというエピソードに対し、「お寺のためではなく陸前高田のために、たまたま普門寺が窓口となった」と仰った。話を更に聞くと、遺骨の受け入れを怒って拒否したお寺もあったそうだ。ここで、普門寺が陸前高田という地域の中でどのような立ち位置、存在なのか気になったため、尋ねた。

岡庭：結構地域と繋がってるお寺っていう感じなんですかね。

熊谷さん：どうなんだろうね、向こうが何と思ってるか分かんないけど繋がりたいと思ってるけど。うちの副住職の方がむしろ今青年会議所やってるから、去年まで理事長やってたし。今県の副理事長だから。

岡庭：ああそうなんですね。

熊谷さん：普通のそういう人たちと接するのはすごく重要で、俺はお寺の関係だけでまとめたけど、彼は高田で知らない人いないんじゃない。

岡庭：へえ～。

現在、息子さんは青年会議所で役職があり、積極的に外部の人とも関わっていると言う。熊谷さんと息子さんのほのぼのとしたエピソードもこのとき聞くことができた。

6-2.東日本大震災について

次に震災経験について伺った。

6-2-1.東日本大震災当日

岡庭：どのように震災は経験されましたか。

熊谷さん：私の仕事してる部屋でパソコンの前に座ってたんですよ。

岡庭：はい。

熊谷さん：そしたら急に揺れがきて、1週間くらい前に1度地震があったから、余震だと思ったのね、

岡庭：あ、そうだったんですね。

熊谷さん：そうしたら余震と思ってたのがそれを上回ってきたわけよ。ちょっと待てと、立てないぞと。これやばいなと思って携帯は一応持って、外に出なきゃということとでとにかく窓を開けなきゃと。

岡庭：はい。

熊谷さん：(中略)うちの女房は高田の町へ出かけてるし、うちの息子は気仙沼で遊んでた。まずお母さんに急いで帰ってこいよと電話したけど通じなくて、メールを入れたらメールは飛んだんだよね。(中略)うちの息子は連絡しても通じなくて、娘とたまたま連絡が取れて、それで私が連絡してみるってことでいったら無事に避難所にいるよと。でそれでちょうど高いところに登ってみてたら津波がこう(・・・)。

岡庭：ええ(・・・)。

熊谷さん：(中略)そのところでちょうどうちの奥さん帰ってきて。こりゃ大変だ津波だ大変なことになるつつつてすぐ炊き出しの用意とか、毛布あったら探せて、あと飲み物あったかなあ、烏龍茶が確かあったとか言いながら用意してたけど、結果的には誰も来なくて。

岡庭：ああ、来なかったんですね。

熊谷さん：間にあの公民館があったり学校があったりで、みんなそっちでおさまったのね。でここって1番最後の場所だから、遠いからみんなここまで逃げてこないわけ。

岡庭：ああ～。

熊谷さん：で逃げてきた人もお寺だから中に入って休もうって気しないみたいで、

岡庭：(笑)

熊谷さん：電気も付いてないし、車の中で一夜を明かして帰っちゃった、でそんなときに烏龍茶をやったりなんかしたんだけど、そのくらいしかできなくて。で次の日からはまあ段々、亡くなった人の話が出てきて(・・・)。

岡庭：ああ(・・・)。じゃあ地震が起きてすぐは、逃げるってよりも避難所としてお寺を？

熊谷さん：うん、あの要するにお寺の状況がどこも痛んでなかったから避難所で迎えるようだなって、準備をしてどうやってご飯を炊こうっていうね、電気が止まっているし。ガスも最初の頃怖くて付けなかったんだよね。(中略)

2日目か3日目に息子さんが帰ってこられ、お寺も家族も無事だったそう。そこからすぐにお寺で困っている人を迎え入れる準備を整えていて、人の為に動いていたという話がとても印象に残っている。

6-2-2.東日本大震災翌日以降～

それから東日本大震災後の生活のお話を伺った。

岡庭：ご自身は特に避難生活をしていたというわけではないんですね。

熊谷さん：うん。ただ結果的には避難者が1人もいなかったんで、さあじゃあ次はどうしようと。何かしなきゃなというときに福井県からボランティアで泊めてほしいというボランティアの人たちが来たの。

岡庭：はい。

熊谷さん：（中略）大本山永平寺（熊谷さんが修行をされたお寺）が福井県にあるので、それだけでも受ける、嬉しかったのね。それで避難者がいないっていうことを確認してOKしますっていうことで。3/20から6/20の3ヶ月。（中略）1年くらいいてくれても良かったけど、それが互いに限度だったことで。綺麗に出ていったね、ちょっと寂しかったけど。でもその後もいろんなボランティアを受けてたのね。東京国際大学ってところから来たし、あと最終的には東大寺学園。（中略）

岡庭：へえ～。

熊谷さんは多くのボランティアの人が来てくれて心強く嬉しく感じ、お寺に泊めていた。その際人の力は大きいと思ったそう。また、追悼のためのマーチングバンドや合唱、オーケストラのコンサートも開いたりなどもしているそうで、枠組みに括られることのない、柔軟で自由で幅広い交流を大事にしている印象を受けた。

ご自身も震災を経験されて間もない中なのにもかかわらず、視点がすでに避難者やボランティアの人、など「外」にあった。しかも、陸前高田だけにとどまらず、全国の色々な人を受け入れていたのである。宗派の違う宗教関係の人も助けに来てくれたそう。上でお寺と地域との繋がりについて述べたが、熊谷さんは「地域」だとか「知り合い」「宗派」などという括りにとらわれず、幅広く柔軟に何事も受け入れられる方なのだろうと思った。また、外国の方も普門寺に来てくれたというエピソードも話してくれた。

熊谷さん：外国人も五百羅漢（今回主に取り上げるプロジェクトで）彫っていったよ。

岡庭：あ！

熊谷さん：キリスト教徒が仏像彫っていったよ。

岡庭：すごいですよね、それって。

熊谷さん：だからね、みんな勘違いしてるのはその、宗教で色々やっちゃいけないとか思ってるのおかしいんだよ。日本の宗教観てのはさ、例えば八百万の神

様に始まって、全ての神様を受け入れる体質なわけじゃん。

岡庭：うん～。

熊谷さん：んで自分たちは無宗教ですって言うてるけど、じゃあ 1 番そこがいい国って日本だよ。品格が高くて、あの、人を大事にして、おもてなしの国と言われている、世界中で日本に憧れてるのは何でって。別に今更修行する必要ないからだよって。みんながそういう自覚を持って、ある段階にはきてるわけよ。そこから進んでないだけで、俺たちはなんか昔と変わんねえよなって言うてるけど江戸時代とも変わってないのよ。精神面は。それだけ仏教とか神様が、人と仲良くしましようねっていう教えがいきわたってるから、人同士を大事にする素養は持ってるわけ。日本人自体に。それは悪い人もいるよ、中にはね。でもそうやって日本人てのは宗教観いらないわけよ。生活自体が宗教に根ざした生活をしてる、知らないうちに。だから宗教何を信仰するのっていったら、正月は神様に拝んでるでしょ。亡くなった人が出れば仏様に拝んでる。結婚式はキリスト教。こんな節操のないって思うけど。日本多神教だから。それをいいとこどりしてるわけよ。

(以下略)

私はこれらのお話を聞いて、お寺のご住職さんのイメージを良い意味で覆された。今までの私が抱いていたイメージは、堅苦しくて型にハマっていて、気難しい昭和の頑固親父、みたいなものだった。しかし熊谷さんは真逆で、気さくでユーモアに溢れ、物腰柔らかい方であった。娘さんの結婚式も教会でやったと笑顔で話していて、何となく「お寺」「宗教」と聞くと、カッチリとしていて身が引き締まる感じがし、怖かったのだが、その不安はすぐに解消された。この熊谷さんの「人が好きで寛容で、何事もまず受け入れられることのできる姿勢」が、五百羅漢像制作プロジェクトの成功の要因の 1 つなのではないか。ここまでのお話で熊谷さんの外交的な一面がよく分かった。

6-3 五百羅漢プロジェクトについて

6-3-1. プロジェクト概要

熊谷さんにプロジェクトの概要をお聞きしたので簡潔にまとめることとする。発起人はアートセラピストの佐藤文子さんである。佐藤さんは多摩美術大学の大学院を卒業しており、アメリカでも心理を学んだ。彼女は教育委員会で一人暮らしの人への心のケアをする仕事をしていて、熊谷さんとの共通の友人の紹介で知り合い、陸前高田のためになることを具体的に考え始めたという。最初は復興の一環として普門寺のお土産を作るのはいかがでしょうか、という案が出たようだ。最終的に佐藤さんが様々な専門家とコネクトを繋ぎ、五百羅漢像の制作が決まった。その際に懸念点などはなかったのか熊谷さんに尋ねたところ、や

はり夏の開催ということもあり、お盆の忙しい時期に負担ではあると感じていたそう。しかしこれを受け入れた理由として、身元不明者のお骨を預かり、お寺で保管していたことが大きかったという。お骨を預かったことで遺族の悲しみが分かったそう。熊谷さんはこう語った。

熊谷さん：あれがなかったら（お骨を預かっていなければ）遺族の悲しみが分からなかった。亡くなった現象よりも死ということでは同じだから、同じことしかやらないわけよ。でも遺骨を預かったことでそこにいたのがうちの檀家さんだったってのもあれば、拝むのに違う意味が出てくる。苦しかったのがそこで逃れることができたり。それからまだ見つかってない人たちの悲しみが分かるのよ。こりゃ苦しいよなって。（以下略）

岡庭：なるほど。

熊谷さん：どうしても見つからない人のためにはやっぱりうちで供養してあげなきゃいけないんだなって。最初の頃よく話したのは、あのとき荒れ狂う恐ろしい海だったけど、今は母なる海なんだと。その中に静かに眠って穏やかに昇天してます。だから肉体が減んでいく様がゆるやかに極楽に向かっていく。ていう解釈をしてくれと。苦しんでるんじゃないんだよ。そういうふうな解釈をしてほしいのね。遺族の方には。それがあのいろんな人の力で可能になってきたなって。（以下略）

岡庭：ああ～そうなんですね。

このプロジェクトでは全国にビラを配り、全国から参加の申し込みがあった。熊谷さんはプロジェクト中は説教や禅を行い、基本的に参加者に自由にやらせていたそう。そして色々な人・彫刻などの専門家が集まったことで、遺族の安らぎの場が生まれたそう。



(写真1 普門寺 五百羅漢像。2024年8月7日、筆者撮影)

6-3-2.普門寺だからできたこと

この五百羅漢像制作プロジェクトにおいて、「普門寺でなければできなかったことはないか」と問うた。すると熊谷さんは、「お骨を預かったことによって人が集まってきたこと」そしてそれにより「助け合い広がったこと」が大きいと仰った。身元不明者のお骨を預かり、そこからボランティア団体、法隆寺、唐招提寺、西大寺、鶴岡八幡宮、長野善光寺、そしてアートセラピストの佐藤さんなど、本当に沢山の人が自由に開けている普門寺に集まってきた。友が友を呼び、輪が広がっていったのだ。これは預かったお骨に対し、「遺族の人の何かになれば」と、様々な依頼を受け入れた熊谷さんの人望と人間力の賜物であると言わざるを得ない。普門寺、熊谷さんでなければ成し得なかったことである。

6-3-3.なぜ羅漢像なのか

先行研究を読んで生じた疑問として、上で「様々な制約や懸念が加わり、参加層に限りが出てくるのではないか」という疑問が生まれたことを示した。それに対して熊谷さんは「亡くなった方を仏様にし、極楽にいったことが感じられる」という点で羅漢像に意味があると仰っていた。これに関しては以下の6-4-4.と絡めて考察する。

6-4-4.熊谷さんが思う鎮魂とは

次に「鎮魂」とは何なのか、亡くなった人を慰めるとはどういうことか熊谷さんなりのご意見を伺った。

熊谷さん：実際に、津波のときの海に光が走ったっていうのを見た人がいる。

岡庭：へえ（・・・）。

熊谷さん：俺が見たわけじゃないから本当かどうか分かんないけど、空から光が夜、こう走ってきた。だから魂を阿弥陀さんがもしかしたら救ってる姿っていうふうに解釈してもいいんじゃない。

岡庭：ああ（・・・）。

熊谷さん：で、遺族がそう解釈した瞬間に自分が救われるじゃない。

岡庭：うん～。

熊谷さん：それが1番の目的なの。本当にあるの？っていう科学的根拠はっていう人々には説明しても意味がない。自分の思いの中で極楽に行っちゃんと安心してるねって思っあげることが亡くなった人の供養なんだ。

岡庭：確かに確かに。

鎮魂とは亡くなった人が救われていることを自分の内面で浄化して理解すること、そし

て亡くなった人が安心して居るよ、というのが目に見える場所があることだと言う。一見それは生き残った私たちのみが救われることのように思われる。しかし、私たちがやり場のない思いを、解釈によってうまく昇華することが亡くなった人の供養にも繋がり、鎮魂となるわけである。

目に見える、とは、普門寺でいう「五百羅漢」の像がそうだ。実際に自分の五感で未知の「死」をどうにか納得のいく形で認識、知覚してあげることが、生者にとっても死者にとっても良いのだろう。その点で、「羅漢」であることが今回のプロジェクトにおける「鎮魂」の目的に大いに合致するものであったと思われる。魂を入れる儀式で犠牲者が救われることが実際に確認できるからである。

6-3-5.鎮魂や追悼の意を祈るだけではなく「芸術作品」として表す意味

最後に、このインタビューの核心となる「なぜ死者に向けた芸術作品があるのか、それにはどういった価値があるのか」という問いについて尋ねた。

岡庭：音楽とか、羅漢像とか、そうやってやっぱりただ祈るだけじゃなくて、こう目に見える形とか耳に聞こえる形にすることってどう意義があると思われませんか。

熊谷さん：あのね、お経を読むと、俺たちはいいのよ。ただ一般の人たちにとっては馬の耳なんだよね。

岡庭：ああ～。

熊谷さん：でも目に見える様々なものは現実に自分たちが経験して自分たちの思いがそのまま伝わるし、そういうその、行動を自分たち自身がとれる。だから例えば願い桜（普門寺にある桜で、花の1つ1つが市内外の人によって制作されたもの）にしてもそうだけど、全国の人たちがいろんな願いを込めて供養するために桜を奉納してくれる。そういったことが手にとってやることで、言葉とか文章よりもより強いものでメッセージが届く。それを見た人が、すごいね、全国の人たちがこんなに。って思うだけで違ってくるじゃん。

岡庭：確かに。

熊谷さん：五百羅漢もそうだけど、出来上がってみんな感動してるわけよ。すごいねって。

岡庭：うんうん。

熊谷さんが仰るように、「芸術作品の制作」は自らが主体となって身体を動かすことができる。そして自分の願いや、亡くなった人に対する「こうであってほしい」という思いを率直に表現することができる。「死者に対して何か能動的に働きかけたい」という場面や目的に対し、そこに「芸術」というものがうまく機能するのだと理解した。確かに、お

経を唱えてもらうことでも死者の霊を慰めることは可能かもしれない。しかしそれは私たちは完全に受け身の状態なのであり、自分らの手を持ってしてメッセージを死者に届けられるわけではない。そこで、「自分が自分の力で、自分の思いを大切な人に発信できた」と自信を持って思うことのできる手段として芸術作品制作が有効なのである。そしてその自由な思いの表現の発出によって、「死者はきっとこうあるだろう」と自分の中で仮の形でも納得すること、そして死者の存在を芸術作品の垣間に何らかの形で知覚することが芸術による力で可能になるのである。

またそれに加えて、「メッセージが届き、全国の人が反応してくれる。」というセリフからは、人との交流を大切にしている熊谷さんらしい一面が見えた気がした。

7.分析と考察

先行研究で疑問を感じていた点について順にまとめていく。

まず1点目の「鎮魂の営みはあくまで生き残った私たちのためではないか？」という点について、熊谷さんのお話からわかったこととして、「私たちが納得し、気持ちが落ち着くということが死者への鎮魂そのものである。」ということだ。また今回の五百羅漢像制作プロジェクトでは、制作物が羅漢であったことから、より「死者の魂の安らぎ、慰め」という意味合いも強く感じる事ができた。それにより、先行研究では私たちの療法としてのアートであったが、このインタビューでは「死者と私たちを含めた空間における架け橋としてのアート」の意義を確認できた。

2点目の「生き死にを連想させる羅漢は遺族にとって負担ではなかったのか？羅漢像を制作物として設定することで制約が加わってしまうのではないか？」という点について、確かにキリスト教の熱心な信者が羅漢像について理解すること、このプロジェクトに参加することは難しかったのかもしれない。しかし、海外の人が羅漢像を彫っていた話や、イタリアから取材に来た人がいる話を聞き、加えて熊谷さんも全くといってよいほど宗教にこだわりや固執した考え方を持っていなかった。実際に普門寺には震災後、宗教や国、立場（被災者、遺族、ボランティアなど）の違いを越えて大勢の人が集まったのである。したがって、「宗教によっては参加できないのでは？」という質問自体が愚問のような気がした。そして、羅漢像を制作することは、遺族にとって負担であるどころかむしろ、亡くなった人が供養されたと実感できる点で効果的だったようだ。

また、鎮魂とは何か、鎮魂の芸術的表象の意義は何かという疑問について、私たちが想像や解釈によって亡くなった人が穏やかにいてくれていると思えば安心すること、そして芸術を間で用いることで、それが実際に行動で認知できるため、芸術がその達成を後押ししてくれることがあるということが考えられた。

8.結論と課題

「死ぬこと」「亡くなった人がいる場所」などは絶対に分からないことである。熊谷さんは、鎮魂とは「亡くなった人が安らいでいるということが目に見える場所があること」、「私たちが解釈によって亡くなった人が落ち着いていると思ひ込み安心すること」そして鎮魂の芸術的表象の意味については、「難しいお経を理解しやすくし、目や耳で認識できるようにすること」であると仰った。このように、未知のものに対して、どうにか普段通りの方法で知覚して納得のいく形を見つけ、踏ん切りをつけて昇華するという意味で、死者に捧げる作品作りがあるのではないか。芸術とは実際に五感を用いて体感するものである。その点で、分からないものに対し、「自分はこう思う」「自分はこうであってほしい」という気持ちや願望をそのまま表出する手段として芸術は打ってつけなのではないか。そうすることによって私たちが救われ、それが死者の供養にも繋がるのである。そこには理屈を超えた一見無駄とも思える莫大なエネルギーがある。しかしそれこそ意味があるのだ。

また、今回のインタビューを通して、熊谷さんの人間性から「お寺観」「宗教観」などという自分の中で難しく捉えていたものが大きく変わった。良い意味で垣根を設けず、人を寛容に受け入れる。五百羅漢像制作プロジェクトでも、見ず知らずの人と知り合うことがやりがいになっていったと話していた。私はどうしても人間関係を狭く深くに絞って限定してしまう節があるので、自分にはない考え方を学ことができ大変有意義な時間だった。

また今回のインタビューでは、五百羅漢像制作プロジェクト発起人の佐藤さんや、実際の参加者（特に遺族）の方の声を聞けていない。それらへのアプローチが加われば、より明確に鎮魂の意義などについて考察できただろう。

このインタビューを通し、自分が大好きな芸術の可能性を改めて考えることができた。また、人と繋がり人を受け入れ、人を大切に作る熊谷さんの素晴らしい人間性から刺激を受けるものがあり、大変貴重な経験ができた。

9.参考文献

井上太郎.(1999).『レクイエムの歴史 死と音楽の対話』.河出文庫.

河東仁.(2020).「大災害からの復旧復興においてアートの果たしうる機能：もう一つの別の時空間,そして鎮魂」.コミュニティ福祉学部紀要,22,97-106.

佐藤文子,小田部黄太,若麻績敏隆,熊谷光洋.(2021).『東日本大震災 陸前高田 五百羅漢の記録—こころは出口をさがしていた—』.星和書店.